

はけちな中産階級が力を持っていたのである。  
 その上、ベルリンにはフリードリヒ大王の治世を偲ばせるものがある。かつてベルリンは帝国の砂採  
 取場だったが、今ではドイツの首都である。

ベルリンにはいろいろな人種が入り交じっているが、これは不幸なことである。文化の発達のために  
 は理想的とはいえないからである。その点で、最後の偉大な皇帝はフリードリヒ・ヴィルヘルム四世  
 「在位一八四〇―一八六一年」である。ヴィルヘルム一世には趣味がなかった。ビスマルクは芸術には明き盲  
 だった。ヴィルヘルム二世は悪趣味であった。

ベルリンの醜い部分をなくしていこう。ベルリンの美化のためには何も惜しんではいけない。ドイツ  
 帝国首相官邸は、世界の主の館と見まがうばかりになるのだ。そこに至るには広い並木道をいくつも通  
 り、凱旋門や陸軍バンテオンや人民広場も目にするだろう——息を呑む光景だ！ こうして初めて我々  
 は唯一のライヴァルであるローマに勝つことができるのである。サン・ピエトロ寺院やその広場がおも  
 ちゃのように見えるくらい、スケールの大きなものをつくらうではないか。材料は御影石を使おう。  
 北方の平野に残っている古いドイツの建造物はほとんどいたんでいない。御影石なら我々の記念碑も永  
 遠に残るだろう。海が再び平原を覆い尽くさない限り、一万年たっても今と同じに立ち続けるのである。  
 ゲルマン・北欧風といわれる装飾様式は世界中に、南アフリカにも、北方の国々にも見受けられる。  
 キリシヤの伝説によると「ブレ・ルナ「月以前」文明」として知られる文明があるという。この伝説に  
 は海に沈んだアトランティス大陸の帝国が言及されているようだ。

私の業績を評価するなら、「人種」がすべてに卓越するという考え方を広めたことを第一におきたい。  
 これは世界が忘れていた思想である。第二に私はゲルマンの優越性に文化面での確固とした裏づけを与

えた。実際我々が今日手にしている力は、強力で広範囲な文化を伴っていないければ、許されるものでは  
 ない。それを成し遂げることで我々の存在は正当化されるのである。

この目的達成のための手段は、戦争遂行に要するものをはるかにしのいでいる。私は物をつくり上げ  
 る人間でありたい。

私は今戦争を指揮しているが、これは私の意志に反するものである。軍事問題に精魂を傾けているけ  
 れども、目下のところ私よりうまく処理できる人間がいなからである。だから私の同僚が私同様に仕  
 事をうまく片づけていくれば、私は口を出したりしない。

農夫は攻撃されると、先祖伝来の財産を守るため銃をとって戦う。私が戦争をしているのも同じ気持  
 ちである。身を守るための手段なのである。

いつの日か、我が軍の武功も色あせるだろう。スペイン継承戦争の後では、三十年戦争を覚えてい  
 る者は誰もいなかった。フリードリヒ大王の戦闘のおかげで一七〇〇年頃の戦いは忘れられてしまった。  
 ライプツィヒの戦い「一八一七年。プロイセン他の連合軍にナポレオン大敗」はセダンにとって代わられた。  
 今日ではタンネンベルクの戦いやポーランドや西部戦線でさえも、東部戦線のせいで影が薄くなりつつ  
 ある。こうした戦いが忘れられる日も来るだろう。

しかし、我々がこれから建てる記念碑は時に負けることはない。ローマのコロセウムは時の流れに生  
 き残っている。ドイツでも多くの大聖堂が残っているではないか。

前世紀、ゲルマン共同体の再建はプロイセン人にゆだねられていた。現在、偉大なるドイツを築き、  
 世界の覇者に押し上げることができるのは、南ドイツ人の力があってこそである。



建設の仕事に関しては、特に南部の人間を当てにしている。ベルリンは一番優れた建築家に任せよう。南部の人間はるか昔から文明の中で育ってきているからである。

私はいつも政治的に考えて行動する。ウィーンが高さ二百メートルのモニュメントを建てたいといつても私は賛成しない。ウィーンは美しいが、それ以上美しくする必要はあるまい。どのみち私の後継者がそんな事業に必要な許可を出すとは思えない。

ベルリンはいつの日か世界の首都となるのである。

## 51 一九四一年十月二十四日 夕

ゲスト ローマから帰ったフォン・リンテレン陸軍中将

人間の業も無に帰する／宗教対科学／教会による自然現象の解説／ヴォルテールとフリードリヒ二世／科学の反撃／教会と宗教の信仰／百六十九の宗教は間違っている／ロシアの聖像破壊は愚の骨頂

この地球上のどの生命も、どの物質も、人間のつくった制度も、いつかは古びて朽ち果てる運命にある。だが理論としては、どの制度も永続するべくつくられるのである。もつとも崩壊の種をすでに持っていることもあるが、最も固い鉄もいつかはもろくなる。地球もいつかは消滅する。人間の業も無に帰するのだ。

するのだ。

すべての物事は周期的に現われるものだ。宗教はいつも自由な探求精神と対立している。教会と科学との対立は、時として火花が散るほど激しくなる。自らの利益を守ろうとする教会が時にはわざと譲歩し、結果として科学が急進性を失うこともある。

現在の学校教育のシステムでは、こんなおかしなことが起こる。午前十時、教義問答の時間に、生徒は聖書に基づいて世界創造を学ぶ。午前十一時、科学の時間に進化論を学ぶ。しかもこの二つの説は完全に相反しているのである。少年時代の私はこの矛盾に悩まされて、頭を壁に打ちつけたこともあった。教師の誰彼に、さつき習ったばかりのことと違うと文句をいい、教師もまた困り果てていた。

聖書の内容には象徴的意味合いがあるというのがキリスト教側の説明である。四百年前に同じことをいった者は、神を賛美する人々に火あぶりに処せられた。寛容さを示すようになって、宗教も数世紀前に比べると立場をよくしているようである。

科学が真理にたどり着くにはまだまだ探求を必要とする——この事実を宗教は利用し尽くせるだけ利用しようとする。すでに解明されているものには目もくれない。科学をハシゴにたとえてみよう——一段上ることに見晴らしがよくなる。しかし科学は物事の本質が分かるとはいわない。科学がそれまで事実だと信じていたことを撤回すると、宗教はほくそ笑んでこういう。「それは我々がいつていたことだ!」。科学とはそういうものだということをおぼえておられるからいえるのである。科学が独断的な態度をとるようになれば、それは教会と同じになってしまう。

神が雷光を起こすという時、ある意味でそれは正しい。しかし教会が主張するように、神が落雷を発生させるわけではない。自然現象についての教会の説明が間違っているのは、教会に下心があるからで

# Hitler's Table Talk 1941-1944

## ヒトラーの テーブル・トーク 1941-1944

上

ヒュー・トレヴァー＝ローパー解説  
吉田八岑 監訳

三交社